

文化による差別

食う。飲む。寝る。歩く。これらは文化の一部である。

会話する。交わる。抱く。眺める。聴く。

これも文化の一部である。

わたしは自分をグルメ（食通）であり

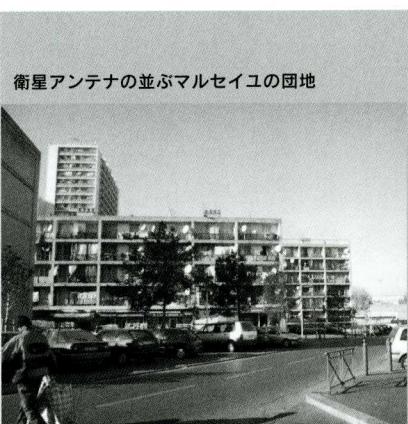
グルマン（食いしん坊）であると思つており、ほとんどなんでも口に入れる。日本料理はもちろん、中華料理、フランス料理、無国籍の料理。

料理に垣根があると、誰が思うだろう。ところが、文化には垣根があり、境界があると、誰もが思つてゐる。その垣根とは何か。そうした垣根があると、何故思ひ込まれているのか。

外国に行つてみよう。たしかに人びとは違つたことばを喋り、違つたお金を使ひ、食事やあいさつの仕方も違つてゐる。あなたは心細く思うかもしだれない。しその心細さは、日本国内の見知らぬ土地を旅するときと、どれほど違つてゐるだろう。その心細さは、文化の違いに由来するのだろうか。

こんなことをいうのは、同じ国に住みながら、文化が違うという理由で排除されている人びとが、世界にはたくさんいるためである。たとえばわたしが研究しているフランスでは、ムスリムの人びとが全人口の一〇パーセント近く住んでいる。彼らの多くは、北アフリカや熱帯

アフリカ、中東から来た両親から生まれた第二世代、第三世代の若者たちである。彼らはフランスで教育を受け、フランス語を喋り、フランスのポップスに夢中になり、フランスの法律にしたがつて生きている。しかし、彼らは「移民」「ムスリ



衛星アンテナの並ぶマルセイユの団地



郊外の壁のいたるところに
グラフィティが描かれている

国民国家との関係

ム」などとよばれ、「フランス人」とは明確な一線が引かれてゐる。その彼らに対して、学業、就職、居住において厳しい差別がなされている。

このような文化の名による差別ないし区別は、日本を含めたどこの国でもおこなわれてゐることである。文化とは、人間が日々生活していくうえで不可欠の要素であり、他者との交流を可能にするための媒体であるはずだ。それなのに、それは何故排除と差別の道具にされているのだろうか。

わたしたち人類学者の多くは、個別の文化を尊重し、文化的差異に対しても敏感でありたいと願つてきた。その文化が排除のための道具として用いられるなどとは、考えもしなかつたのである。しかし、現実がこのようであるとすれば、認識を改めることが必要だろう。

グローバル化が進行するなかで、国家はどのように変容してきたのか。国民国家と文化はどのような関係にあるのか。文化的同質性をもたない国家を考えることは可能なのか。二〇〇八年三月一二日に、こうしたテーマで、民博と国立歴史民俗博物館共同で国際シンポジウムを実施する。関心のある方は、ぜひお問い合わせ、ご参加ください。

文化と国民国家

時論
新論
理想論

竹沢 尚一郎
(たけざわ しょういちろう)

本館民族文化研究部